



たまだれ
No.75

玉垂

Tamadale

特集

例祭の斎行 ～日々の“感謝”を伝えともに“喜び”をわかちあう～

第63回神宮式年遷宮(令和15年)に向けて

「お伊勢様のお神札」(神宮大麻)と「氏神様のお神札」のいろは
特別連続寄稿

AI時代に求められる畏敬知性とは

／天籟株式会社代表取締役医師
プラネタリーヘルス・イニシアティブ代表理事 桐村里紗

トピックス

明神通り振興会 新緑青もみじライトアップ特別イベント開催!!

四代目 玉田玉秀斎独演会 小國神社ものがたり～だいこくさまとともに～

遠江国一宮

小國神社のご由緒

創

始は神代と伝えられ、延宝八年（一六八〇）の社記によると、人皇二十九代欽明天皇の御代十六年（五五五）二月十八日に本宮山峯（本宮山）に御神霊が顕れた後、勅使が遣わされ、山麓約六キロの現在地に社殿を造営し、正一位の神階を授けられました。

それ以来、年々御神前に幣帛を捧げられ文武天皇大宝元年（七〇一）春十八日に勅使奉幣の際、特に十二段舞楽を奉奏されました。延喜七年（九〇七）延喜式内社に列せられ、中世には徳川家康をはじめとする武將など、朝野の崇敬が極めて篤く近世に至っております。

元龜三年（一五七二）の戦では、家康公は御神霊を別所に遷し、願文と三条小鍛冶宗近作の太刀を奉り戦勝を祈願した後、社殿を全て焼失しました。

天正三年（一五七五）に勝利を得た家康公は、御本殿の造営、拝殿・楼門を再建され、更に社領五九〇石の朱印を奉り、以降世々の徳川將軍家より、社殿の改造・修復料を寄進されました。

明治六年六月十三日に国幣小社に列せられ、明治十五年三月に再度の火災により御本殿以下建造物など消失しましたが、明治十九年に復興され現在に至っております。平成十七年には御鎮座一四五〇年祭が斎行され、『遠江国の一宮さま』として崇敬され広く親しまれております。

また、平成十五年九月十四日には、秋篠宮文仁親王殿下同妃紀子殿下のご親拝を賜り、平成十八年十一月八日には、神宮祭主池田厚子様のご参拝、平成二十九年四月二十九日には、高円宮妃久子殿下のご親拝を賜りました。

令和六年十月二十五日には、初の海外分祠シラチャ小國神社がタイ王国にご鎮座となりました。

小國神社と

徳川家康公の知られざる歴史・秘話も…
是非ご覧ください



小國神社のはじまりから
現代までの壮大な物語

小國神社ものがたり
ご祭神とともに



公式ウェブサイト特設ページで
スペシャルムービー公開中

小國神社ものがたり

検索



日本の神様の物語は
『日本の良き国柄』、『伝統』、『文化』を
今に伝えています。

この物語は、静岡市在住の絵本・造形作家のたたらなおきさんよりご奉納いただいた全長約七メートルの絵物語をもとに作成をしたアニメーションです。神代より語り継がれてきたお話には、

日本人の「豊かで優しい和の心」の原点が描かれています。神々の営みの中から「正しい道筋をたてて生きてゆくことの大切さ」や、「思いやりのこころ」を学びましょう。



フォトスポット「もみじ橋」が復興（令和8年6月11日）

青もみじの季節に

昨年より、明神通り振興会会員の皆さまのご奉仕により、試験的に実施した『青もみじ』のライトアップが、本年より本格始動となり五月九日に鑑賞イベントを開催、多くの参拝者が夜の幻想的なご神域を散策されていました。初夏から盛夏にかけての新たな楽しみの一つとしてご参拝いただければ幸いです。

一方で、本年六月十一日に一宮川に架かる『もみじ橋』が復旧いたしました。『もみじ橋』は、県内屈指のフォトスポットとして、県内外はもとより諸外国からもフォトグラファーたちが訪れ、SNSや写真展などで多くの美しい写真が世に出されました。

しかしながら、令和四年九月の台風十五号の影響で被災、橋が流出、復旧は懸案事項のひとつでしたが、激甚化する風水害の影響もあり、計画が大幅に遅れていました。この度、正光建設株式会社代表取締役山本欣宏様に多大なご尽力を賜り、元の場所に復する事が叶い、『もみじ橋』を待ち望まれていた皆様も安心されたことと存じます。ところで、世相に目を転じてみますと皇室典範の改正について、現在も様々な報道が行われています。なかには、ご皇室の長い伝統と皇位の尊厳を陥れ、国論を二分するような論調も目立つことは大変残念でなりません。さらにインターネット上では、AIを駆使し、有識者があたかも喋っているかのような事実無根のフェイク動画などが多数流出しています。そのようなフェイク動画の発信先の一つが香港であったとの分析もあります。今や、国外からも容易に国民の分断を煽ることが可能であり、その標的がご皇室にまで及んでいる事実には私たち日本国民は危機感を持ち、対処していかなければならないと思います。

顧みますと令和二年十一月、お姿麗しく秋篠宮文仁親王が皇位継承順位一位の「皇嗣」となれたことを国内外に宣明する『立皇嗣の礼』が、天皇陛下の憲法に定める国事行為として執り行われたことは私たちの記憶にも新しいことと存じます。これの意味するところは、初代神武天皇から今上陛下に至るまで百二十六代続く男系男子の血統こそが世界で唯一のインペリアルファミリーの背骨であるという揺るぎない事実です。

この度の皇室典範改正も、この趣旨に沿った内容となることを願って止みません。

職員一同、神慮を畏み、ご皇室のご安泰と国の安寧、世界の平和を祈り、社務に精進して参ります。夏に向かい各位のご壮健を心よりお祈り申し上げます。

令和八年六月二十六日



大神様のもとに集い

日々の感謝を伝え
ともに喜びをわかちあう

「お祭り」は日本が世界に誇る「祈りの伝統」です

●例祭とは

神社にとって最も重要な祭祀の一つで、最も重い^{さいかい}斎戒を経て、年に一度執り行います。その神社やご祭神にとって特別に由緒あるお祭りで、俗に例大祭とも称されます。

当社では、ご祭神大己貴命（おおなむちのみこと）が本宮山に鎮まったとされる吉日です。

●神社の「お祭り」の本当の意味とは？

お祭りという、デパートのお客様感謝祭や、文化施設などでは、国際映画祭、芸術祭、あるいは最近流行のオクトーバーフェスト・音楽フェスなど賑わいを見せるイベント的な意味合いで使われることもあります。

神社においてもお祭りによっては、行列が登場し、笛や太鼓の調べが流れ、屋台が立ち並ぶなどの賑やかな部分もあります。

しかしながら、神社でのお祭りの本当の意味は、そのような賑やかな部分も含め、心身を清め、神様に対面し感謝の真心を捧げることにあります。

●「まつり」の語源

「まつり」の語源は神様のお力に従い奉仕する「まつらうふ」という言葉に由来するとされています。

また、「まつり」ということばには「待つ」という意味も含まれています。

太古の昔、神様は遠いところからいらっしゃり、山や岩そして木などに宿ると考えられてきました。

このようなことから、神様が現れることを「待ち」、ご神威に服することが「まつり」の語源であると考えられています。



例祭期間の ご報告

本年の例祭期間は四月十六日(木)末社塩井神社の垢離祭の斎行に始まり、十七日(金)には前日祭を斎行、無事に十八日(土)を迎え、例祭を執り行い、同日午後二時から国指定無形民俗文化財『古式十二段舞楽』を大前に奉奏しました。

翌日、十九日(日)十一時から古式十二段舞楽を奉奏、午後二時から神幸祭では、天候にも恵まれた中で神輿渡御が行われ、大宝元年(七〇一)の勅使参向の時代絵巻を再現した勅使行列が参道を華やかに飾りました。本年の勅使役には森町町議会議長中根信一郎様にご奉仕いただきました。また、期間中には静岡新聞社・中日新聞社による取材もあり、例祭の様子と、古式十二段舞楽の歴史と魅力が地元紙で紹介されました。

賑やかなご神域の様子に大神様もさぞ、お喜びのことと存じます。氏子崇敬者の皆様におかれましては、常日頃変わることのない祭事、行事へのご奉仕に對しまして心より感謝を申し上げます。

それでは、例祭期間の様子をお届けします。



▲例祭斎行後に挨拶を述べる宮司



▲静岡県神社庁長 河村基夫様



▲浜松市長 中野祐介様



▲森町長 太田康雄様



▲衆議院議員 山本裕三様



▲衆議院議員 稲葉大輔様



▲例祭期間には、御神燈と雪洞が奉獻されます（4月17日）



▲舞揃え 舞の仕上がりを確認します（4月16日）



▲塩井戸の塩水を汲み、舞楽奉仕者の身体を清めます（4月16日）

四月十八日(土)
本年の例祭は、森町長太田康雄様・浜松市長中野祐介様・静岡県神社庁長河村基夫様をはじめ、一八〇名を越える皆様にご参列をいただき、厳肅のうちに斎行いたしました。
多くのご参列を賜りましたこと重ねて御礼申し上げます。

例祭の斎行

四月十七日(金)
前日祭は、例祭の無事の斎行を祈る大切なお祭です。
その起源は、重要な祭祀の前夜に神霊の降臨を祈る祭りが始まりと考えられています。
責任役員の皆様ご参列のもと斎行いたしました。

前日祭の斎行

四月十六日(木)
責任役員の皆様・舞楽奉仕者ご参列のもと、末社塩井神社の垢籬祭を斎行いたしました。このお祭りは例祭を斎行するにあたり、神職・舞楽人が身を清める為の塩水を汲むお祭りです。

垢籬祭の斎行



▲御神宝捧持者の行列（4月19日）▲



▲稚児行列ご参列の皆さま（4月19日）



▲約180名の方々にご参列いただきました（4月18日）

試楽（古式十二段舞楽奉奏）

四月十八日(土)

この日の舞楽奉奏は「試楽」と呼び、翌日の奉奏は「本祭」と呼ぶ習わしがあります。

「試しの楽」と書きますが、舞楽人一同は真剣そのもののご奉仕です。

氏子入り奉告祭の斎行

四月十九日(日)

氏子入り奉告祭を斎行し、氏子地区内に新しくお住まいになられた皆さまにご参列いただきました。

氏子地区内に新たに加わられたことを大神様にご奉告申し上げ、さらなるご加護と氏子地区の安泰をお祈りいたしました。

古式十二段舞楽の奉奏

四月十九日(日)

優雅で力強い舞には、国と地域の平安そして、人々の繁栄の祈りが込められます。

本年は天気にも恵まれ、ご神前に奉納される舞と奏楽を多くの皆様が拝観されていました。終了後には、永年奉仕者の表彰式を行いました。

大場詞信指南役をはじめ伝承に関わる保存会の皆様のご尽力に感謝申し上げます。



勅使役 中根信一郎様（4月19日）▲



神幸所祭 宮司祝詞奏上（4月19日）▲



▲神輿渡御の様子（4月19日）



神幸所祭 神子舞の奉奏▲

神子舞とは

当社の神子舞（御神楽）は、天正18年（1590）の「遠州小國一宮天宮神領之事」が初見で、400余年の伝統を誇ります。

延宝6年（1678）の「配当帳」に「御子 式部・蔵人・靱負・斎」とあり、すでに近世初期には4人の舞となっていました。

現在の指南役、原田多加資様は伝統文化の継承に尽力されています。

指南役 奉仕者

原田多加資
鈴木 彩葉・天野 花
山崎 菜結・朝比奈李実

神子舞奉仕者御芳名

（敬称略・順不同）

森町指定無形民俗文化財 神子舞(巫女舞)



神子舞の奉奏

四月十九日(日)

本年は天候にも恵まれ、無事神幸所にて神幸祭を執り行い、勅使役、神宝捧持者、神輿役奉仕者など総勢二〇〇名を超える皆様が供奉・参列するなかでの神子舞の奉奏となりました。一糸乱れぬ舞姿はまさに神様に奉仕する姿そのものです。原田多加資指南役を始め、ご奉仕の皆さまに感謝申し上げます。



大神様へ捧げる「誠の心」
一、三〇〇年続く幽玄の伝統

特殊神事芸能 小國神社古式十二段舞楽

(重要無形民俗文化財)

古式十二段舞楽は、小國大神様への誠心をもって奉納することを本義としています。

大宝元年（701年）春18日、都から勅使（天皇の使者）が都から出向き、現在の社地に里宮を開き、十二段の舞を奉納したことが舞楽の始まりと傳承されています。また、舞楽は、東洋に発達した古代芸術の代表的なもので、『東洋文化の粹』とも言われています。

当社の舞楽の細部には、中央で失われたとされている所作が部分的に残っており、その文化的価値や傳承活動が認められ、昭和57年1月23日文化庁より「重要無形民俗文化財」に指定され現在に至ります。



太平楽



稚児舞



古式十二段舞楽奉仕者御芳名

(敬称略)

獅 子	納 蘇 利	陵 王	二 の 舞	安 摩	色 香	太 平 楽	稚 見 習 児	衣 裳 方	舞 方	樂 行 頭	行 事 頭	副 指 南 役	指 南 談 役
--------	-------------	--------	-------------	--------	--------	-------------	------------------	-------------	--------	-------------	-------------	------------------	------------------

栗田	鈴木	鶴見	村松	鈴山	内田	嶋川	小藤	鈴木	佐野	成瀬	下山	大山	山本	鈴木	寺尾	松田	加藤	小柳	町本	久野	中川	宮谷	鈴木	角木	橋口	石田	野瀬	嶋木	岩川	鈴木	小見	鶴場	大島	高木	北野	天内	白藤																												
強聖	祐一	裕智	秀正	康泰	満健	辰康	考幸	易	柚壯	陽三	稀太	葵	康勝	宏雅	秀公	章正	俊	恵加	明	詞	富	幸	信	廣	志	誠	篤	之	恭	夫	紀	邦	人	高	幸	朗	雄	衣	翔	郎	星	陽	音	希	慈	司	勇	雄	也	朗	勉	史	雅	隆	雄	篤	恭	之	篤	誠	介	志	廣	信	幸

献詠祭の斎行

曇り無き心で詠む

和歌をご神前に

四月十七日(金)、ご奉納いただいた和歌をご神前にお供えし、献詠祭を斎行いたしました。本年の兼題は、「お米」と「青」で、氏子崇敬者の皆さまより作品を募りました。

和歌は、神代から伝わる文化として今日まで続いています。日本最古の和歌は、古事記にも記述があり、須佐之男命が櫛名田比賣の為に新しい宮殿を建てたときに詠まれた歌が始まりとされています。

少ない文字数に込める気持ちは言葉に魂が宿るとされる我が国の言霊信仰にも繋がります。

世代を超えて心に響き合う和歌の素晴らしさを感じて頂きたく存じます。

ここに、ご奉納いただきました作品とご芳名を掲載し、重ねて感謝申し上げます。

(順不同・敬称略)

兼題「お米」

お米(稲穂)は、神様への大切なお供え物と同時に日本文化の基です。



兼題「お米」

子らの声ひびく刈田に風の手が

稲架の稲穂をいずかに揺らす

原田 雅子

お供への真白き洗米盛り上げて

お稲荷様へ祭礼の朝

清水美千代

雪柳またの名前は小米花

五弁に散け土にかがやく

杉山 春代

畦道をランドセルゆくポポポッポ

ゆれる稲穂に光る金髪

竹原 和子

嫁ぎ来て田植え草掻き田の仕事

獲れたてお米の旨さ知りたり

内藤 祥子

大いなる水の記憶にふくらみて

越後の米は今炊きあがる

小笠原小夜子

入院し絶食の日々解かれし日

米粥の一匙幸わせを知る

遠藤 愛子

店先の米の値札を見比べて

三キロ先の農協につく

土屋 浩子

たっぷりの天水含み蓄へし

古古古米の湯気のあたらし

水野 信子

漱石の思はれ人の面影を

宿して『門』の「お米」つましき

柴田 典昭

釜洗う幼き我に飯粒を

無駄にするなと盲いの祖母は

柴田 叔子

鋤きをへてふり向く先のものの陰に

水仙ひともと黄のいろ点す

山田 文好

白妙の指もて米を研ぐ朝に

水冷ゆるごとを 田人思へり

山下 智之

和歌は神代から伝わる

日本のこころです

日本にて生まれた我は知らぬ間に

毎日食べる米主食なり

山本 淳子

晴天に麦の穂の色 太陽に

白米の色もうるはしき 国旗に込めし

誇りは歴史

村田 三恵

炊きたてのお米の香り ふんわりと

今日も幸せ おいしいごはん

牧野百里子

天孫に授けしお米いのちの根

神の恵みに感謝しただく

牧野百里子

飯盒で お米を炊きし 吾子達の

炭つけし顔 木洩れ日に映ゆ

藤原 裕昭

身にしみる母の言葉か エプロンに

付きたる米を 思わず食す

田内 弘子

お米には元気なパワー 宿っているよ

三度食せば みなぎる力

小原かよ子

赤紙に征きて還らぬ 兄様の

供米五勺によろこぶカラス

古木さよ子

一粒のお米も命と 亡母の声

小笠原靖子

炊き上げし新米の香まとひたる

塩むすびなり男の昼餉

樽松 靖彦

神田にて穫れししら米 御酒となし

樂の鉦をぞ盃とせむ

田畝 智志

公園に落花の如く 散りばひし

長粒米の かなしかりけり

海瀬安紀子

稲という母体あつての米なれど

米におは付き 稲におは無し

木村 翠

米粒の如き蕾を ほころばせ

春陽のどかに 雪柳咲けり

遠藤 若葉

兼題「青」

彼岸入り 白木蓮の 高く咲き

空の青さを 我に教へり

伊藤八重子

青空へ 広がる 楓の うすみどり

粒らな 紅き花を たづなふ

清水美千代

つややかな 赤き果実の 失せしのち

青木は ひそかな花を つけたり

杉山 春代

森町の 山あひ 流るる 太田川

やがて 注がむ 青き海原

内藤 祥子

草堤の っぱんに へだつ 空青く

そらより ひびく 秋の 水流

小笠原小夜子

風に 乗り 青田を よぎる 鳥の影

あれは ツバメか 母が見に 来た

松島 良江

信号が青のとまつぎの赤を待つ

休む歳なり沈丁花の路

土屋 浩子

晴れ晴れとブルースカイブルー歌ひ
たる

西城秀樹もいま空の果て

柴田 典昭

海と空富士山見える大崩

通った日々がきらめいている

柴田 叔子

真青からうす紫に変はりたる

あぢさゐの測りがたしよ

水野 信子

青雲のたなびく山の嶺見れば

皇御國は常盤なりけり

山下 智之

我もまた青き宇宙の創造主

年中無休のスーパースター

守谷 弘美

青空に小さな煙突ひとつ見ゆ

煙そよそよ横に流れる

山本 淳子

空と海青い山なみ瀬戸内の

宮島参り白寿の母と

牧野百里子

舞い降りた東寺の池の青鷺は

我を見つめて時は止まれり

藤原 裕昭

オフサイドはわからないけど知って
いる

顔も名前もサムライブルーは

田中 博美

空は青大地は小麦の黄金いろ

踏みにじられてああ幾年ぞ

田内 弘子

見上げれば雲ひとつない青空に

夢広がりし絵顔生れる

小原かよ子

鳩鳥ハ あおき鳥なりそのあおは

ひかりの青なり水面に反える

古木さよ子

おくれ毛のひとすじ頬にかゝりいる

若き海老蔵「青海波」舞う

勝田 洋子

振り返れば我にもありき青春が

アオハル謳歌す令和の若さ

樽松 靖彦

西の方は今は焼野となりぬとも

青色青光黄色黄光

田鍬 智志

もし声に色がそれぞれあるのなら

あなたの声は深海の青

海瀬安紀子

新緑の宵の主演は青もみど

さかさに照らされ何を思うや

木村 翠

あの空を君の喩として編み上げし

青きマフラー朝日に揺れて

遠藤 若葉

兼題「青」

▲雲の隙間から見える小國フルーの青空



世代を超えて心に響き合う敷島の道

清浄な灯りをご神前に

大前を照らす御神燈献燈

清浄な灯りをご神前に

本年の例祭におきましても多くの氏子崇敬者の皆様より、御神燈と雪洞を献燈いただきました。

灯りには元来「火」がつきもので「火」は清め祓いに用いる清浄なものです。

また私たちの祖先は「火」そのものが諸霊を呼び込むものと考えてきました。

大前に灯りをお供えることは、照明としての意味と、ご神域を清浄に整える二つの意味があります。

御芳名

(敬称略・順不同)

(株)阿部	栃木県	豊田合成(株)	森町工場
(有)浦野モータース	森町	(株)長谷川製作所	森町
大石靴店	森町	常陸神宝(株)	埼玉県
大沼建設(株)	森町	みどり写真館	茨城県
岡野建設(株)	森町	(株)エビスシマダ	森町
(株)小倉商店	森町		
春日屋青果店	袋井市		兵庫県
京都奉製(株)	京都府	安間製箸(株)	森町
倉見建設(株)	森町	正光建設(株)	森町
(株)三愛工芸	茨城県	(株)村上社寺工芸社	森町
(株)三永	森町		兵庫県
(株)松鶴	袋井市	(有)破魔矢奉製所	森町
(有)デザインオフィス	神奈川		県
エム・エス・シー			
袋井市			

神賑わいの灯り雪洞献燈

御芳名

(敬称略・順不同)

小国ことまち横丁	(株)鈴木長十商店	ヤマハ発動機(株)	森町工場
ことまち夢小径	(株)鈴木長十商店	あさひな(株)	
小国ことまち横丁	(株)鈴木長十商店	(株)仲孝	
(株)ネクスコーポレーション		(有)朝比奈造園	
(株)久米吉		(株)鈴木建築	
(有)太田茶店		(有)西尾工務店	
神宏クリーンサービス(株)		長岡香料(株)静岡工場	
森のどうぶつ病院		サンフード機販(株)	静岡工場
I T A M A E遊穂		西村医院	
三木の里カントリークラブ		シャトー中川	
松田歯科医院		バイクの森 bike&cafe	
(有)アマノ		金山化成(株)	
アパート管理(同)		シズオカ工場	
(有)大井製作所		ヤスマ(株)静岡工場	
平松建築(株)		(株)山本環境整備	
シーネックス(株)		カネトヨ(株)	
(有)オーキッド		(株)ツカモト	
(株)うこっけい苑		(株)やまひろ関東工場	
大同DMソリューション(株)	静岡工場	松浦製茶(株)	
(株)ザ・フォレスト		台日レストラン	
カントリークラブ		(株)八幡屋茶舗	
(株)菓匠 あさおか		(有)政和電気	
(有)富士鉄工		あしかび さのや会館	
北嶋靴店		(株)鳶の友誠	
しんちゃん農園		遠州みもろ焼	
遠州森鈴木農園(株)		(株)デイトナ	
R V パーク 滝の宮		(株)ジェイエイ	
		遠中サービス	

(株)一宮	(株)袴田製作所	森町工場
(有)今泉土木		
加藤修・孝尚事務所		
カルト(株)		
(株)アイムファイイン		
(有)エムケイデンキ		
(有)アカネ造園土木		
メイクアップ(株)		
(株)旭自動車		
(有)北島電気工業		
(有)ムラマツ住建		
酒の田中屋		
(有)インテリア村松		
マルミ塗装		
木創工房森童		
cafe もりまち		
(株)大塚彫刻芸		
高木建築		
吹きガラス工房		
フロスタファブリカ		
novau ノワイヨ		
(有)萩原造園		
鈴伍酒店		
ヘアーサロンタカギ		
森のびようしつ		
(有)多米建設		
フナギテッケン(株)		
一ノ宮郵便局		
入鹿ハム		
花ぎようざ		
(株)アコルトパッケージ		
乗松刃物		
楽酒処 駿		
工房HAL		
(有)共栄土建		
(株)日本温装工業		
百々や		
中井商事(株)森工場		
日本工機(株)		
暁雲窯		
鈴木土建(株)		
ビューティサロン		
タカヤナギ		
高柳米穀店		
(有)渡辺防水工事		
(有)すずき工業		
(有)ヤマニシ建築		
遠州中央農協		
園田支店		
村松久雄		
(有)守屋モーター		
(株)関東甲信クボタ		
山本フミコ美容室		
美容室たけしの店		
(有)栄産業		
(有)金原石油		
(株)家本工務店		
建機工業(株)		
鈴木美容院		
東京理容		
サイクルショップ		
パストラーレ		
豊一商店		
(有)石田茶店		
(有)鈴木次郎商店		
胡社斎		
遠藤かほる		

特別企画

「お伊勢様のお神札」
(神宮大麻)と
「氏神様のお神札」の



る)が実施されるなど、遷宮へ向けての機運が着実に高まりを見せています。二回目となる本特集は、令和十五年に挙行される『第六十三回神宮式年遷宮』に向けて様々な角度からお伝えしています。

今回は、伊勢の神宮と特に関りが深い私たちの家庭でお祀りする『お神札』と『神棚』についてまとめました。

① 全国の神社の中心として
仰がれる伊勢の神宮

日本全国には実に多くの神社が鎮座しますが、その中でもとりわけ格別な崇敬を集め、神社の中心的な存在として仰がれるのが伊勢の神宮です。

神宮にお祀りされる天照大御神は、ご皇室のご祖先の神様であることから、『日本の総氏神』として大切に敬われ



てきました。太陽の光が国中をあまねく照らすように、すべての人の営みに等しく温かな恵みを注いでくださる神様です。

私たちがどの地域で暮らしていても、まずはこの『お伊勢様のお神札』を神棚へお迎えし、日々の感謝を捧げることが日本人の心に深く根差した信仰の形といえます。

② 神宮大麻(お伊勢様のお神札)の
歴史と明治天皇の尊い思召し

『お伊勢様のお神札』は、歴史の変遷を経て現在の形に整えられました。

かつては御師と呼ばれる神職たちが全国を巡り、お神札を配り歩く時代が長く続きました。一方で、時代が進むにつれて、商業的な面なども強まり、本来の純粋な信仰の形から少しずつ離れてしまう事象も見受けられるようになりました。

そこで明治の御代を迎えた際、明治天皇はこうした状況を改め、『国民が朝夕に正しい形で天照大御神を敬拝できるように』と尊い思召しを示されました。

これにより、ある意味、御師の個人的なネットワークを基にお神札が配られていた古い仕組みを廃止し、『日本の総氏神の象徴』として、国民に等しく神様のご加護が行き渡るよう、一体



第62回式年遷宮当時の
皇大神宮正宮(伊勢の神宮)
写真:神宮司廳発行
『第62回神宮式年遷宮』より



第62回式年遷宮当時の
「宇治橋」
写真:神宮司廳発行
『第62回神宮式年遷宮』より



御樋代木奉迎送行事
昨年は権宮司が奉仕しました
(令和7年6月8日桑名市)



御木曳行事 宮司(中央)が奉仕しました
(令和8年6月6日)

ずつ丁寧^{ていねい}に奉製^{ほうせい}し、全国の正式な神社組織を通して、一斉に頒布^{はんぷ}する現在の神宮大麻^{しんぐうたいま}（お伊勢様のお神札）の制度へと刷新^{しんしゆん}を遂げました。この思召^{しめぞ}しがあればな、私たちのもとにお伊勢様のお神札が等しく届く状況は難しかったかもしれません。

神宮大麻は今も国家の安泰と各家庭の無事を祈る神聖な御璽^{みし}として、全国の皆様の元へと届けられています。

その過程において、明治天皇の尊い大御心^{おみこころ}があったことは私たちが忘れてはならない歴史の一つです。

三 『お伊勢様のお神札』と『氏神様のお神札』をお祀りする

神宮大麻とともに家庭のお祀りに欠かせないのが、『氏神様のお神札』です。神道の信仰において、この二組のお神札を自宅でお祀りすることが大切なことです。

我が国では、自然の様々な事象に神様を感じ、山や川、巨木、巨石などに神様が宿ると信仰され、神々がもたらす恵みによって「生かされている」ことに感謝と祈りを捧げてきました。

自然の中に神々を見出し、畏敬の念（恐れ敬う気持ち）から始まった純粋な祈りは、そこに集う人々により自然発生的に社殿が建てられると、地域を守る神様への信仰へとさらに広がりを見せました。

現代では地域一帯の守り神を広く氏神様と呼びますが、『氏神様』と『産土神様』という異なる起源を持った神様への重層的な信仰が現在の信仰に昇華^{しょうか}されたと考えられています。『産土神様』がその土地に生まれた人々を守る地縁の神様であるのに対し、『氏神様』とは、同じ血筋を引く一族や共通の祖先を持つ人々が、その祖先神をおまつりした血縁の守り神を指します。祖先から受け継いできた命の繋がりを尊び、一族の行く末を見守る存在として仰がれてきました。時代を経てこの

清浄を期して丁寧に奉製された神宮大麻は、11月頃に皆様のご家庭へ頒布されます



二つの信仰は重なり合い、現在の氏神様という信仰になりました。

お神札をお祀りする際には、単に近くの神社のお神札ということに留まらず、お祀りしている神様のことを神主さんに教わるとより親しみと敬いが増すことはもちろん、自身が暮らす地域の新たな発見があるかもしれません。

四 現代の暮らしに調和する神棚のいろは

こうしたお神札をお迎えする神棚ですが、選ぶ際に堅苦しく構える必要はありません。最近では、住宅事情の変化に伴い、アパートやマンションの洋室にも合うモダンなデザインのものや、壁掛けができる神棚を選ぶ人たちが随分と増えました。

それぞれの生活スタイルに調和する、無理のない方法で神様をお迎えすることが何よりも大切です。一般的にお神札は明るく清らかな場所、目線より高い位置などに丁寧に祀りし、お神札の前面が南か東の方向を向くと良いとされています。

自宅にお神札をお祀りし、神棚を整えることは、神さまと人とを結びつけます。また、家庭の和を育むための大切な営みです。お水やお米を新しくお供えし、今日という一日を無事に過ごせることへ手を合わせる、そんなやさやかな時間が、日々の忙しさに曇りがちな私たちの心を優しく整え、穏やかな安心感をもたらしてくれます。

是非とも、『お伊勢様のお神札』と『氏神様のお神札』をそれぞれの自宅にお迎えし、一日が整う「祈りの場所」を大切にしていきたいと思います。

現代の暮らしに優しく調和する多様な形の神棚が選ばれています。



「神杉の木霊」 小國神社の神杉を使用した特別な神だな ▲

AI時代に求められる畏敬知性とは

天籟株式会社代表取締役医師
プラネタリーヘルス・イニシアティブ代表理事

桐村里紗

AIの進化が止まらない今、私たちは人類には、その在り方・生き方が問われています。

人類が自分から外部化した知能は、私たちを遥かに超える情報処理能力と記憶力を発揮するようになっていきます。これらの能力でAIと競争しようという考えは、もはや意味がありません。では、AI時代に人間が育むべき知性とは何でしょうか。

それは、「身体知性」であり「畏敬知性」であると考えています。

AIは世界を記号化する

AIは、この世界を記号として理解しています。りんごという概念を記号として理解することはできても、りんごを食べることはできませんし、りんごを食べて、おばあちゃんの家に咲くりんごの花を思い出して胸が温かくなることもできないのが、AIです。

私たちは、この世界を身体で生きていますから、身体を使って、五感や内臓感覚などをフル活用して、この世界を全身で感じ、体験し、生きる意味を立ち上げます。

AIと同じように、頭だけで何かを理解したつもりになっても、身体を使ってそれを体験しないことには、本当に理解したことにはなりません。

頭でっかちは、AIに任せて、私たちは今こそ、身体を使って世界を生き、それができないAIに教えてあげるときです。

畏敬知性は自然の中で立ち上がる

さらに、身体を使って大自然の中に身を置いたとき、立ち上がる知性を「畏敬知性」と呼んでいます。畏敬知性とは、自分を越えた大いなる生命の働きに触れ、畏怖と畏敬、そして感謝をもって世界と関わる力です。偉大な山、迫力ある滝、人ならざる気配を感じる夜の森などに身を置いたとき、人は、自分の存在の小ささを感じ、大いなる自然に対する畏怖畏敬の念を感じます。そして同時に、自らが大きな生命のつながりの中にあることを思い出します。

神道は、古来、この畏敬知性を暮らしの中心に置いてきました。山や森、

「いただきます」と手を合わせる所作もまた、自分一人の力で生きているのではなく、



AIは膨大なデータを扱うことができるが、力の使い方を決めるのは人間の側にある

多くのいのちと働きによって命を紡いでいることを 思い出す祈りです。

巨木や岩、水の湧く場所に神を感じ、
祀り、手を合わせてきた日本人の感性
は、自然を支配する対象としてではな
く、命を生かす尊い働きとして受け止
めるものでした。鎮守の杜は、祈りの
場であると同時に、土地の水を育み、
生き物の棲み処となり、人の心身を整
える生命の場でもあります。そこには、
人と自然と神々が、切り離されずに共
にあるという日本の自然観が息づいて
います。

私たちは、日々、お米を食べ、水を



日本人は、山や森、巨木や岩、水の湧く場所に神を感じ、▲
祀り、手を合わせてきた

飲み、空気を吸い、土が育んだいのち
をいただいで生きています。「いただ
きます」と手を合わせる所作もまた、
自分一人の力で生きているのではなく、
多くのいのちと働きによって命を紡い
でいることを思い出す祈りです。この
感覚こそ、AI時代にこそ取り戻すべ
き人間の中心軸ではないでしょうか。

AIを方向づける人の知性

AIは、膨大なデータを扱うことが
できます。しかし、何を大切にし、ど
の方向に力を使うべきかを決めるのは、
人間の側にあります。自然への畏怖畏
敬を失ったままAIを使えば、効率化
や利益の拡大だけが目的となり、人も
社会も自然も傷つけてしまうかもしれ
ません。反対に、生命への畏敬を土台
にAIを用いるならば、医療、教育、
農業、防災、環境再生など、地球全体
の健やかさに貢献する大きな力となり
ます。

AI技術そのものよりも大切なのは、
技術を扱う人間が、何に手を合わせ、
何を畏れ敬い、何を守ろうとするのか
です。神道が大切にしてきた自然への

いただきますと手を合わせるのは、
多くの命の働きで命が紡がれていることを
思い出す祈りである



まなざしは、過去の信仰にとどまるも
のではなく、未来のテクノロジーに方
向性を与える智慧でもあります。

今こそ、私たちは神道が大切にして
きた自然へのまなざしを、未来の知性
として受け継ぐときです。畏敬知性こ
そ、生命とAIが共に未来をつくるた
めの羅針盤になるのです。

プロフィール

医師
天籟株式会社代表取締役
一社)プラネタリーヘルス・イニシアティブ代表理事

桐村 里紗



著書紹介

医師として予防医療から終末期医
療まで幅広く臨床経験を積んだの
ち、人が暮らすことで人と地球が
健康になる国際目標である「プラ
ネタリーヘルス」を推進する。
著書に、『腸と森の「土」を育てる
微生物が健康にする人と環境』
(光文社新書)他多数。
主なメディア出演「ホンマでっか!?
TV」(腸活評論家)他。



宮代神饌田御田植祭の斎行

くむかしの手ぶりをそのままにく

令和八年五月三十一日(日)、宮代神饌田において御田植祭を斎行いたしました。当日は爽やかな風が吹き、清々しい空気の中、奉耕者の内山博文様、森町副町長永井雅也様をはじめ、約五十名の皆様にご参列を賜り、五穀豊穡への祈りを込めて古式に則り神事を執り行いました。

◆御田植祭の歴史

当社の御田植祭の歴史は古く、現存する最古の記録「延宝の記録」にもその様子が記されています。平成十一年にこの記録や伝承をもとに、古儀に復しつつ広く公開し、毎年賑々しく斎行しています。

◆民俗芸能公開大会の開催

本年の御田植祭は、森町歴史伝統文化保存会による「第十八回民俗芸能・民俗行事公開大会」も併せて実施いたしました。この公開大会は、町に伝わる伝統行事を記録や伝承に近い形で広く公開するという文化保存の趣旨のもと開催されています。



▲宮司祝詞奏上



▲森町歴史伝統文化保存会 水口呪文を奏上する 榎原淑友様



▲小國神社氏子青年会OB 玉垂会・森町歴史伝統文化保存会奉仕による代掻き牛



▲旭が丘中学校有志の生徒とピエール先生 田作男、早乙女として奉仕された

地元旭が丘中学校の有志生徒の皆様に加え、町内のALT（外国語指導助手）教員の皆様にもご奉仕いただきました。参加者は早乙女・田作男として一列に並び、巫女の鈴振りに合わせて苗を一つひとつ丁寧に植え付けていました。

◆お米は神さまからの大切な授かりもの

稲穂は我が国において、斎庭の稲穂の神勅に示されるように、神様からの授かりものとして大切に扱われてきました。現代においても、主食として私達の食生活には欠かすことのできないものであると同時に日本人のアイデンティティを示す文化的にも意義深い食料です。本祭典と公開大会を通して、伝統文化の担い手を育成しつつ、大切なお米について深く知る機会となれば幸いです。

新緑 ライトアップ 特別イベント開催!!



門前を中心とした地域の活性化を目指して

五月九日(土)、小國神社明神通り振興会(会長倉島正三様)主催による新緑の青もみじのライトアップ特別イベントが開催となり、約一、〇〇〇人が訪れ、賑わいの夜となりました。

当日、ライトアップに併せ、駐車場にキッチンカーや物販などが並び、さながら夜市のような賑わいとなりました。

境内では、子ども用の巨大なエア遊具が設置され、子どもたちは神社に突如現れた遊び場に夢中な様子で楽しんでいました。

さらに、先着二〇〇組に『明神通りオリジナル提灯』を配布、参拝者らは、日が暮れると提灯を手に宮川沿いを散策、浄闇に浮かぶ明かりは、さながら蛍火のようにで風情あるひと時となりました。

本イベントでは、倉島会長をはじめ、振興会に参画する企業の経営陣・社員なども自らスタンプとして参拝の皆様をもてなし、運営を担われました。明神通り振興会会員皆様の崇敬の誠に、心より感謝申し上げますとともに、当社といたしましても、引き続き、地域の活性化に向け様々な団体と共創を実施して参ります。



▲幻想的な青もみじと一宮川



▲日が沈む前から賑わいを見せる夜市



▲家族連れの皆様が多く訪れました



四代目 玉田玉秀斎 独演会

小國神社ものがたり くだいこくさまとともに

小國神社のご由緒を講談で楽しむ!!

五月十七日(日)、大宝殿において、『玉田玉秀斎独演会 小國神社ものがたり』くだいこくさまとともに『』を開催いたしました。本事業は、累代神社を護り続ける神職などで構成される「永職会」の四十周年記念事業として、ご鎮座の由来や神話・伝承を『講談』を通して伝える文化伝承活動として実施いたしました。

講談とは、釈台(机)を張扇でリズムカルに叩きながら、歴史などの物語を独特の語り口で読み聞かせる日本の伝統話芸です。落語家が「会話」で物語を進めるのに対し、講談師は優れたナレーターとして「情景描写や筋書き」で聴衆を引き込む、語り部とも言えます。

当日は、満席の一二六名が観覧となり、玉田師匠の迫真の話芸で物語の世界へ引き込まれ、会場からは時折笑い声や感嘆の声が挙がっていました。

観覧の皆様は、「大変興味深かった」という声や、「また開催してほしい」など、思い思いの感想を語っていました。

終演後は、衆議院議員山本裕三様より祝辞を頂戴し、日本独自の伝統や文化を護ることの重要性や国旗損壊罪の法制化への今後の道筋などについて力強く述べられました。

さらに、この日初めて当社へ足を運んだという参拝者には宮司から記念の品が送られ、会場は賑やかな空気のまま閉演となりました。



▲会場は満員で終始賑わいました



▲躍動感のある話芸に引き込まれました

自民党静岡3区の衆議院議員
山本裕三氏



講演後に参拝された玉田師匠

社頭動静

『桜詣』の開催!!

◆癒しのひとときをご神域で

三月二十一日(土)から四月五日(日)にかけて、桜詣を開催いたしました。この催しは、桜の季節に神様にお参りし、癒しの時間を過ごしていただけるよう開催しています。

古来、山桜は稲の神様が宿り、花が咲くと考えられ、我が国では農耕の始まりを告げる霊木として、日本人の心象風景に深く刻まれています。

開催期間中は、縄巻修巳様による尺八の奉納演奏、濱野洋子先生らによる琴・尺八の奉納演奏、戸山流居合道の奉納演舞、日本伝統芸能の猿回しの奉納、さらには、(株)静岡木工様による神棚の展示販売やワークショップなども開催となりました。

ご参拝の皆様は、春の訪れを喜びつつ写真撮影をするなど、思い思いに過ごされていました。



▲縄巻様、越智様による尺八・篠笛の奉納演奏



▲参拝後に御神札と記念品を受け取る新小学1年生の皆様

勸学祭の斎行

◆健やかな成長と学びの成就を祈願して

四月四日(土)午後十一時より勸学祭を斎行いたしました。今年は氏子区内の二十三名の新入学生の皆様にご参列いただき、学業成就と通学安全を祈願しました。

普段耳にすることがない「勸学」という言葉ですが、学問を勧め、勉学に努める者を励ますことを意味します。祭典では、子供たちが無事に入學の日を迎えられたことを大神様にご奉告申し上げ、祭典後お神札と記念の品をお渡しいたしました。

当日は、緊張した面持ちの児童、生徒らの真剣な眼差しに大神様もご感心されたことと思います。

今後とも更なるご加護のもと、新しく始まった学校生活の中で大いに学び充実した日々をお過ごしください。

献茶祭の斎行

◆季節の恵み

「福德神饌茶」をお供えして四月十六日(木)献茶祭を斎行いたしました。

本祭典では、薫り高い銘茶の産地森町で茶葉を営む方々により結成された「小國神社献茶会」が、初摘みの新茶をご神前へお供えし、国の安寧、国民の繁栄そして茶業の発展を祈ります。

本年は、小國神社献茶会会長大石敏勝様、森町長・森町茶業振興協議会会長太田康雄様を始め、五十名を超える参列者のもと、煎茶道 静風流守本湖堂様、天野智堂様にお点前のご奉仕をいただきました。

献上されたお茶と同品質の「福德神饌茶」は、小國ことまち横丁にてお買い求めいただけます。

近年の健康志向から、リラックス効果を高める「水出し煎茶」も人気の召し上がり方です。これからの季節に是非お試しください。



▲煎茶をお供えする天野智堂様

杭迫柏樹先生によるご浄財の奉納

四月二十五日(木)森町出身、京都府在住の書家・杭迫柏樹先生より、ご浄財をご奉納いただきました。

杭迫先生は、ご年齢を感じさせない精力的な創作活動はさることながら、『暮らしの中でもっと書を活かしてほしい』との願いを込め、様々な奉仕活動も実践されています。

去る四月二十三日には、高市早苗首相の座右の銘である「崇高雄揮」の書が首相官邸に納められることとなり、当社宮司が首相官邸にお届けに上がりました。総理は、書の大家の気韻あふれる作品に感激されていました。

杭迫先生の変らないご崇敬に深く感謝申し上げますとともに、益々のご健勝とご活躍を、心よりお祈り申し上げます。



▲首相官邸 宮司(左)・高市総理(右)



▲杭迫柏樹先生(右)

端午祭の斎行

『子宝』、子供たちは

五月五日(火)午前十一時より端午祭を斎行いたしました。本年は十九組のご家族が参列し、賑やかな祭典となりました。

ご神前には、菖蒲と柏餅をお供えし、当社で命名した四十五名の命名児の芳名帳を大前に奉安し、健やかな成長をお祈り申し上げました。

端午の節句は別名「菖蒲の節句」とも呼ばれ、江戸時代に民衆に広がったとされています。菖蒲は尚武に通じることから、男子の健やかな成長を祝いました。今日では、子供たちの健やかな成長を祈る伝統行事として、親しみ深い節目の一つとなっています。

ご参列された藤貫様は、「子供がすくすくと元気に成長してくれれば。」と、我が子への温かな思いを語られました。



▲和やかな表情の藤貫様ご一家

もりもりマーケットの開催

◆地元有志が提案する

心と体に優しい森町の暮らし
五月十七日(日)みもろ焼き陶房前駐車場を会場に、毎年恒例となる「もりもりマーケット」が開催となりました。第十一回目となるこのイベントは、森町に店を構える土屋製菓の今泉京子様たちが中心となって企画し、『森町の魅力』を伝える人気のイベントです。当日は、参加者一同が拝殿にて正式参拝をおこない、会場では約二十五店舗が軒を連ね、健康に配慮した食品や飲み物、こだわりの手作り雑貨などが販売されました。

本年は天候にも恵まれ、参拝者らが店主らと和やかに言葉を交わし、買い物も満喫されていました。



▲多くの参拝者で賑わいました



▲(株)久米吉 倉島正三様

株式会社久米吉様による ご浄財のご奉納

◆大神様への感謝と真心のお供え
この度、(株)久米吉代表取締役 倉島正三様より、「こんにゃくの日」にちなむ、五月二十四日(日)にご浄財をご奉納いただきました。

(株)久米吉は、安政元年創業の老舗こんにゃく店で、その品質から全国のスーパーなどにも流通しています。さらに、倉島様は本業の傍ら明神通り振興会の会長としてもご尽力されるなど、地域社会の発展にも貢献されています。ご奉納いただいた多額のご浄財は、神社の護持運営に資するよう有効に活用させていただきます。

倉島様の変わらないご崇敬の真心に、深く感謝申し上げます。

ご縁広がる『えんbaum』が さらに美味しくなりました!!

◆皆さまにおなじみの参拝土産が

リニューアル!!

この度、小國神社参拝土産と人気のご縁を広げる『えんbaum』がリニューアルとなりました。

本品は、バウムクーヘンとしては珍しく生地に『米粉』を五〇パーセント使用しています。

私たちにとおってお米は主食として食卓に欠かせないものである一方、お米(稲)は神様からの賜り物として、また神様への最も重要な供え物の一つとして、我が国の文化の根源を築いています。

今回のリニューアルでは、『お米の多様性』に注目したヤタローグループが開発を担い、ことまち横丁限定で販売する運びとなりました。

ご参拝の折には、さらにしっとり、美味しくなった『えんbaum』をぜひお求めください。



リニューアル後、さらに人気急上昇!!▲

神々とお祭り

私たちの祖先は、かみまつ神祭りのなかから生き方を学び信仰の礎としてきました。

また、古くからの伝承や歴史をふまえ、豊かに暮らす知恵を生活のなかに生かし、神々と生活をともにしてきました。

毎年同じ時期にお祭りが繰り返し行なわれ、私たちはその中で信仰や文化をかたちづくってきました。

「お祭り」とは、

日本の伝統にもとづいて、神々に対する祖先のこころを今に伝える大切なかたちです。



新生児選名・命名について

生を受け、生を伝える 「人の一生」

様々な節目を迎えるとき、神さまへ「感謝」と「ご奉告」を行うことは、古来より受け継がれた日本の文化です。

当社では、日本の伝統文化に則した新生児にふさわしい名前を選名いたします。また、ご家族で考えられたお名前候補の中から、ご相談の上、選名いたします。

お名前が決定の後、お子様の無事成長と一生の幸せをご神前でお祈りし、お神札、朱印を押印した命名書を授与しております。

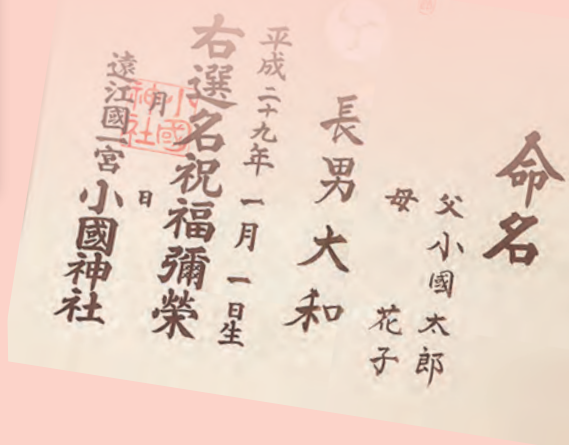
初穂料 一〇、〇〇〇円也

命名

令和八年三月一日
令和八年五月三十一日

中野 桜佑 磐田市 鶴見 奏斗 森町 中村 虎白 袋井市

佐々木 弥桜 掛川市 山崎 央真 掛川市 浅野 愛菜 浜松市

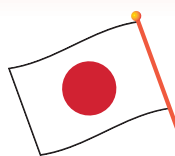


お申し込み方法など詳しくは、小國神社 選名・命名奉告で検索

小國神社 選名・命名奉告

検索

当社で命名奉告をされた皆様には
5月5日の端午祭へご案内いたします▶



神社を知れば日本がわかる



“まっりの国、日本”



イラスト:小國神社ものがたり
作:たたら なおき

神社の境内に点々と小さなお社、その正体は？

神社の境内を歩いていて、小さなお社、祠を見かけたことはないでしょうか。これらは神社（本社）に対して摂社、末社と呼ばれる神社で、規模の大小を問わず多くの神社に付随して存在します。

摂社は本社のご祭神と縁故の深い神を祀っており、ご祭神の妃神、御子神、荒魂の他、社地の地主神を祀ることもあります。摂社という語は15世紀の『日本書紀桃源抄』に見えており、伊勢神宮の別宮を指す語として登場しています。小國神社では本殿東の御垣内に鎮座する並宮社が摂社となります。

末社は「えだやしろ」とも称され摂社に次ぐ格式を持ち、様々な理由により祀られたため、必ずしも本社の御祭神と深い縁があるとは限りません。その初出は早く12世紀の『吾妻鏡』に見え、中世前期には既に末社が存在したことがうかがえます。中世以降に流行した伊勢、八幡、白山、日吉、諏訪、稻荷、天神といった神社の分祀が多く、小國神社では、境内の内外に多数の末社があり、その創祀時期や由緒はバラバラです。

是非とも各地の神社へご参拝の折は摂社、末社にもお参りください。

これからの 行事

12月



写真コンテスト入選作品
『ことまち池と黄色桜』(上田修平)



しわす おお はらえ しき
師走大祓式



12月31日午後3時より、師走大祓式を斎行いたします。下半期の罪穢れをお祓いし、清々しく新たな年を迎えることができます。どなたでもご参列ができますので、ご家族皆様でご参列下さい。



つき なみ さい

月次祭ご参列のご案内

「つきなみ」とは毎月
平和と安全を祈る大切なお祭りです
日時：毎月1日・18日10時より(約30分程度)
場所：小國神社拝殿

月次祭は、毎月欠かさずに行われ、神職が日本国、また地域の平安と、氏子崇敬者の安泰を祈ります。月参りともいわれ、この日にお参りするとご加護が受けられるともいわれています。歴史的にも大変古く、その始まりは、平安中期に編纂された延喜式にも「月次祭」の記述があります。

事前申込みは必要ありません。どなたでもご参列できます。ご参列の際は、祈祷受付にお声かけください。

11月

しもつき
霜月

1日	月次祭	(午前10時)
1日	一宮祖霊社月次祭	(午前11時)
3日	明治祭	(午前10時)
6日	本宮山月次祭	(午前10時)
7日	山神社例祭	(午前10時)
15日	七五三祝祭	(午前10時)
18日	月次祭・稲祭	(午前10時)
19日	疫神齋	(午後 4時)
21日	地鎮祭	(午前10時)
23日	新嘗祭	(午前10時)

12月

しわす
師走

1日	月次祭	(午前10時)
1日	一宮祖霊社月次祭	(午前11時)
6日	本宮山月次祭	(午前10時)
中旬	鎮火祭	(午後 3時30分)
16日	甲子祭	(午前10時)
18日	月次祭	(午前10時)
18日	滝宮例祭	(午前11時)
18日	初穂献納祭	(午前11時30分)
25日	煤佛祭	(午後 1時)
31日	大祓式	(午後 3時)
	除夜祭	(午後 4時)
12月中旬	治郎柿ワイン完成奉告祭	

小國神社の 祭典・

9月～

宮代神饌田拔穂祭のご案内

10月1日午前11時より、宮代神饌田拔穂祭を斎行いたします。神饌田で行われる稲穂の収穫神事で、5月の御田植祭で地元旭が丘中学校の生徒が植えた稲を、白装束姿の奉耕者が忌鎌で丁寧に刈り取ります。収穫された稲穂は新嘗祭でご神前にお供えされ、一年の五穀豊穰に感謝を捧げます。

9月

ながつき
長月

- 1日 月次祭 (午前10時)
- 1日 一宮祖霊社月次祭 (午前11時)
- 6日 本宮山月次祭 (午前10時)
- 18日 月次祭 (午前10時)
- 23日 秋季皇霊祭遙拝式 (午前10時)
- 23日 一宮祖霊社秋季祭 (午前10時30分)

10月

かなづき
神無月

- 1日 月次祭 (午前10時)
- 1日 宮代神饌田拔穂祭 (午前11時)
- 1日 一宮祖霊社月次祭 (午前11時)
- 6日 本宮山月次祭 (午前10時)
- 17日 神嘗祭遙拝式 (午前10時)
- 甲子祭 (午前10時)
- 神嘗奉祝祭 (午前10時15分)
- 18日 月次祭
- 福神像頒布式 (午前10時)



秋季皇霊祭遙拝式

9月23日、宮中では歴代の天皇・皇后・皇親の御霊を祀る祖霊祭『秋季皇霊祭』が厳かに行なわれます。当社では、同日に皇居内の皇霊殿の方角に向けて拝礼し、皇室の弥栄と国の安寧を祈ります。



新嘗祭

11月23日10時より、大神様へ1年の収穫と諸産業発展の感謝を申し上げる新嘗祭を斎行し、奉納農産物感謝祭や篤志奉納者への感謝状の贈呈式も執り行います。年間の祭典の中でも最も重要な祭祀の一つです。



一宮花しょうぶ園

今年も美しく開花しました



神さまの懷に抱かれながら初夏の風情に親しむ

本年は、五月二十一日(木)から六月十四日(日)まで開園いたしました。期間中は、五、三、八四名の来園者が訪れました。

本年は、生育状況も上々で昨年より早い開園となりましたが、美しい花々を楽しむことができました。

花しょうぶは、日本の園芸文化の結晶とも称されます。その花姿は「日本の美」の象徴であることから明治天皇も好まれたと伝わります。

ご来園の皆さま一様に穏やかな表情でゆつたりと鑑賞されていました。



公式HP・SNSのご紹介

小國神社
公式Webサイト
(Domestic)



小國神社
公式Webサイト
(Overseas)



小國神社
公式Instagram



◇ 辞令交付 ◇

巫女見習い 渥美 智尋

小國神社巫女に任ずる

(令和八年五月一日付)

巫女見習い 浜田 梨瑚

小國神社巫女に任ずる

(令和八年六月一日付)

巫女見習い 丹田 橙醒

小國神社巫女に任ずる

(令和八年六月一日付)

古田 百麗

小國神社巫女見習い

に任ずる

(令和八年六月二十二日付)

新体制のもと、職員一同、神慮を畏み、宮司を輔け、祭祀の厳修とご神徳の発揚に精励致す所存です。

今後とも倍旧のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

編集後記

玉垂七十五号をお届けします。

今の季節、早苗が日毎に育っていく様子や、たわなに実ったとうもろこし畑が青々と広がり、神々が運ぶ季節の尊さと生命力溢れる風景に心が躍ります。

神社では日々、神様に「神饌」として海や山、野の恵みなど土地の作物などをお供えし、神様からの御恵みに感謝を捧げています。

一方で、私たちは日常、食卓で手を合わせ、『いただきます』と感謝の心を捧げながら過ごしています。神祭りにも、日常にも現れるこの『美しい日本の心』を大切にしたいものです。

他方、近年我が国の食料安全保障について様々な議論がなされています。これらは政治や経済の仕組みだけで解決できる問題ではなく、国民それぞれの心持ちも大切なことだと感じています。問題解決に取り組むキープポイントのひとつとして、私たちの祖先が大切にしてきた『和の心』の有り様を今に活かすこともまた大切であると思います。

まずは目の前にある食事に、手を合わせて深く感謝する。そんな神道の原点とも言える『静かな営み』がもつ『無限大の可能性』に思いを致し、社務に精進して参ります。



イラスト：小國神社明神通り縁結び公式キャラクター「こうち君」「こうち姫」